

バトンを引き継ぎ、 秋田への貢献を誓う

齊藤 大樹

(株式会社齊藤光学製作所 代表取締役社長執行役員)



■秋田に支えられた3代の歴史

2021年9月に父より経営のバトンを引き継ぎ1年が経ちました。弊社齊藤光学製作所は私の祖父が埼玉県で創業し、誘致企業として秋田県美郷町（旧千畑村）において工場を操業致しました。光学部品で使用されるガラス材の「研磨加工」を主軸の技術として、現在では次世代半導体基板の研磨加工並びに技術コンサルティング事業を行うなど、事業フィールドを広げて参りました。そして父の時代には、M&Aを用いた事業領域の拡大や、秋田県への本社機能移転など、真に秋田の企業として大きく成長させました。

父が社長に就任した年齢は33歳、当時祖父は60歳、全く同じ年齢の巡りあわせで、一般的に若いと言われる60歳で父は勇退し、私が33歳で代表に就任することとなりました。この事業承継に対して、様々な声がありました。「若すぎる引退ではないか」、「社長として経営を担うには若すぎないか」。そんな声に対して「自信を持って父が私にバトンを託した覚悟を無駄には出来ない」と強く思い、経営に向き合った1年でした。

そんな事業承継を果たした弊社は、「秋田」というキーワードを外して語ることができません。祖父の時代の「誘致企業での工場操業」。父の時代の「本社移転」。秋田県の力添えがあったからこそ、45年の歴史を紡いでくることができました。私が掲げる弊社ミッションは、「材料価値を最大化し、より良い未来社会の創造に貢献し、地域をリードする」ことです。そして、具体的なミッションとしては、秋田県における「研究開発型リーディングカンパニー」を目指し、会社経営を通じてふるさと秋田に貢献したいと考えております。

■私が目指す秋田における企業像

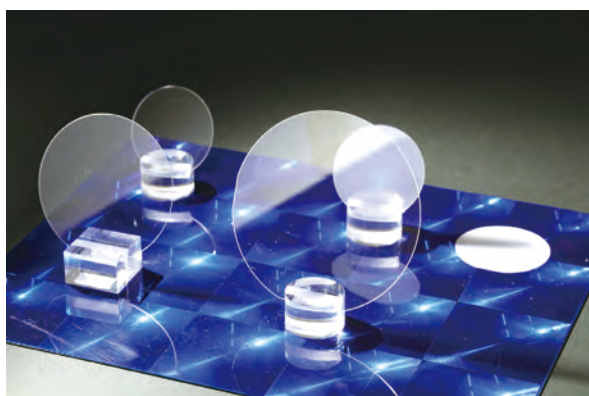
秋田県の産業界において、「少子高齢化」・「付加価値額」・「賃金水準」が大きな課題になっているのは皆さんご承知の事実です。このような状況の中で、我々は高度技術と高度人材のミックスハブ（交差集約拠点）となるリーディングカンパニーを目指すことを掲げています。売上規模・従業員数ではなく、この秋田において我々がなくてはならないという企業価値を創出し、地域に必要とされ、社員が豊かにここ秋田で生活できる企業を目指していきたいと思っています。大きな軸としては、下請け的な製造業モデルから脱却し、研究開発や技術開発といった付加価値が高い「知的労働型」の事業を

成長させて、付加価値の向上並びに賃金水準の向上を実現していこうと考えております。また、我々が持つ光学半導体関連企業や大学・公設試験場とのネットワークを生かし、「斉藤光学製作所に関わることで新たな技術開発やスタートアップを実現できる」というプラットフォーム的な企業を目指すことで、高度人材と高度技術が我々をハブにして秋田の地域に波及していくような未来を描いています。

また、昨年の9月に代表に就任した際に社員と約束したことがあります。それは、「最高の仲間で顧客に最大の価値を提供するために社員第一主義の経営を行う」ということです。私自身、2017年に秋田に戻り弊社に入社してから5年、徹底的に社員と向き合うことに多くの時間を使ってきました。一人ひとりの社員が「本心から今の自分の仕事に対して価値を感じることができているのか」、「自分の人生における目標や思いはあるのか」、「幸せだと自分が思える時間を過ごせているのか」、本気で向き合って話してきました。私を知る人はお分かりだと思いますが、ポジティブで明るく何事にも取り組む性分ですので、秋田に戻り弊社に関わったこの5年間は非常に幸せだと思っているのですが、そこで共に働く仲間たちがどこか物足りなさそうに日々を過ごしていることに残念な気持ちを覚えておりました。難しい仕事・大変な仕事であっても、それに向き合い張りのある幸せな生活をここ秋田で送ってもらうことが私の目指すところであり、そのロールモデルをこの地域に発信することが秋田への貢献の一つになると信じています。

■企業の成長と組織・人の成長

そんな私の目指す会社の姿を実現するために、真剣に取り組まなければならないことがたくさんありました。祖父と父が弊社の事業を大きく成長させてくれたことは紛れもない事実ですが、事業の成長に組織の成長が伴っていないことが顕著に課題として表れていました。具体的には、新たな仲間が会社が増えるにつれて組織が形骸化してゆき、明確な課題として、会社のビジョンの共有、一人ひとりの社員へのフォローアップ、時代変化に合わせた社内の仕組みのブラッシュアップなどがありました。



(弊社製品)



(社員の打合せ)



それらの課題に向き合った5年前の私は、前職の経験から会社組織の仕組みづくりに問題があると仮説を立て、改善活動に汗を流しておりました。前職は上場企業勤務でしたので、そこでは会社組織の仕組みや社内ルールがしっかりしており、教育制度、福利厚生制度等も充実していました。斉藤光学製作所はそうではないから、組織が形骸化し、社員の離職も増加していると思っていたのです。もちろん、改善活動への取組みによって社員の働く環境は明らかに改善し、「働きやすさ」という面では現在も社員から高い評価を頂いております。しかしながら、それだけでは社員一人ひとりのモチベーションや幸せの向上には繋がらないという事実と直面したことで、組織開発の必要性や個の尊重の重要性に気づき、一人ひとりに寄り添った経営の取組みを行っています。特に社員との「対話」を大事に考え、全社員との「1 on 1 面談」や管理職層の毎月のフォローアップ面談を通じて、一人ひとりの挑戦を応援しています。いつまでも私が続けるわけにはいきませんので、今の目標は私と同じような「人に向き合う人材」を社内でたくさん育成していくことです。

■斉藤光学製作所のファンづくり

そのような気づきを与えてくれたのは、国際教養大学の学生とともにプロジェクトを組み推進した2年間でした。学生の目線から社員へのインタビューや私への問いかけを行ってもらう中で、本当の課題を気づかせてくれました。また、そんな学生との関わり合いによって社員たちも刺激を受け、大きく視野を広げて自分に向き合う人たちが増えてきました。

地方の中小企業はリソースが足りない、とよく言われます。実際に、課題発見力、人的リソース、資金力等々の不足により企業価値の向上が足踏みしていることが多いと思っています。そこで私は、「足りないリソースは社外から獲得する」、そのためには「斉藤光学製作所に関わりたと思うファンをたくさん作る」ことが大事だと考え、多くの人脈を作るため、また、弊社に関わってくれる人たちを求めるため、様々な活動に参加してきました。

この5年間で弊社に関わってくれた学生は20名以上に上ります。その一人ひとりが弊社のファンになってくれたと信じていますし、これからの将来において何かしらの接点で関わってくれるものと期待しています。

■豊かな人が集まるところには人が集まる

私は、地域も企業も「豊かな人が集まるところには人が集まる」と信じています。これから加速する少子高齢化の中、人材採用の戦略の一丁目一番地は「働きたいと思う会社を作る」ことです。自動化や省人化はもちろん製造業として進めなければなりませんが、第一優先は企業・人づくりです。

豊かさの定義は人それぞれかもしれませんが、物心両面で豊かに生活できている人が弊社並びにこの地域で増えることが、秋田の明るい将来にとって一つの鍵になるのではないかと考えます。



(本 社)

会 社 概 要

- | | |
|------------|--|
| 1 会 社 名 | 株式会社齊藤光学製作所 |
| 2 代 表 者 | 代表取締役社長執行役員 齊藤 大樹 |
| 3 所 在 地 | 〒019-1512 秋田県仙北郡美郷町本堂城回字若林118-3 |
| 4 電 話 番 号 | 0187-85-3300 (代表) |
| 5 F A X | 0187-85-3302 |
| 6 U R L | https://saito-os.com |
| 7 設 立 | 1977年(昭和52年)11月 |
| 8 資 本 金 | 1,000万円 |
| 9 売 上 高 | 5億5,787万円(2022年8月期) |
| 10 従 業 員 数 | 62名(2022年8月現在) |
| 11 事 業 内 容 | 光学分野・通信、半導体分野で使用するガラス材、結晶材の研磨加工
●受託加工(外径加工・研磨・洗浄)
●技術サービス(受託評価・試験・研究、加工コンサルティング、研磨関連資材・装置販売) |
| 12 経 営 理 念 | 心豊かな製品の提供に徹し、お客様の信頼こそ企業存続価値と利益に通じると心に誓い、静かな企業成長を目指し、物心両面の幸せを目指す。 |